生活　「指導者用デジタル教材」を用いた授業展開例

小学校 第２学年
生活科 学習指導案

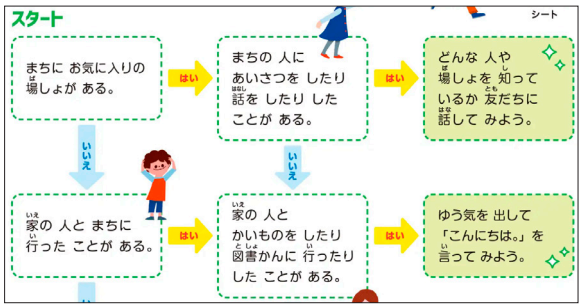
京都女子大学
准教授 齊藤 和貴

単元名	まちが大すき　たんけんたい（14 時間）
単元のねらい	地域と関わる学習や、公共物や公共施設などを利用する学習をとおして、地域やそこで働いている人々について考えたり、公共施設などのよさやはたらきを捉えたりすることができ、自分たちの生活はさまざまな人や場所と関わっていること、身のまわりにはみんなで使うものがあること、それらを支えている人々がいることがわかり、地域の人々やさまざまな場所への親しみや愛着をもち、人々に適切に接したり、公共施設や公共物を大切にし、安全に正しく利用したりできるようにする。
本時のねらい	地域の場所や人々についてみんなと交流し、身のまわりに親しみを感じる場所や気になる場所があることに気づき、地域への関心をもつことができるようにする。（第１時）
指導時期	５～６月

本時（第１時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	●「指導者用デジタル教材」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。	
	指導者が用意した資料から、まちにある場所を思い出す。	●電子黒板でまちの画像を示す。

©2024 KYOIKU-SHUPPAN CO.,Ltd.All Rights Reserved

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
展開	**教科書下巻p.23の「わくわくスイッチ」に取り組む。** **「わくわくスイッチ」の課題を達成するために、自分たちが住むまちについて知っていることを話し合う。**	●電子黒板に「指導者用デジタル教材」を映しながら、一人一人が「わくわくスイッチ」に取り組み、まちとの関わり方やこれからの活動の課題について知る。 ●グループやペアになって、自分が知っている人や場所について伝え合う。 ●どのような人や場所があるのか思い出す。 ●勇気を出して挨拶をすると、まちの人との関わり方がどのように変わるか予想する。 ●家の人がどこで買い物をしているか考える。
まとめ	**「わくわくスイッチ」の課題を達成すると、活動が終わったときにどのようなよさがあるのか予想する。**	●電子黒板を活用して、「わくわくスイッチ」の自分のセルの位置を確かめ、課題を達成すると、まちとの関わり方の変化や自分の成長があるのか考える。 

指導者用デジタル教材　活用の実際

本時の導入部では、学区の中にある子どもの生活に密接に関わる場所や特徴的な場所や、お世話になっている人の画像、子どもが触れることのできる実物などを用意しておく。画像の場合、印刷したものを黒板に貼って示すこともできるが、プレゼンテーションソフトを活用して電子黒板に映し出すこともできる。1枚ずつ提示し、どのような関わりがあるのか問いかけることで、子どもはこれからの活動が自分たちの生活するまちを探検し、まちの人たちと関わる活動であるという見通しをもつことができる。

展開部では、「わくわくスイッチ」に取り組み、一人一人がまちとどのような関わりをもっているのかを振り返ることによって、本単元における自分の課題を見つけることができるようにする。課題には、

❶「どんな人や場しょを知っているか友だちに話してみよう。」
❷「ゆう気を出して『こんにちは。』を言ってみよう。」
❸「家の人にどこで買いものをしているかきいてみよう。」
❹「家のまわりに何があるか思い出そう。」

という具体的な活動が示されている。❸は家で家族に聞いて調べてみることを促しているが、家で調査する前に本時の中で予想しておくことで、調査することへの意識や意欲を高めることができる。そのため、4つの課題のすべてを本時の中で実際に取り組むことができる。

本時のまとめの場面では、これらの課題に取り組むことによって、自分とまちとの関わりがどのように深まり、自分自身にどのような成長があるのかを予想することができる。それによって、本単元でのねらいや学び方を意識させ、活動への見通しや意欲を高めることができる。

指導者用デジタル教材　活用の効果

「わくわくスイッチ」は子どもが対象への関わり方や実態を振り返り、自覚させることを可能にするツールである。また、ゲーム的な要素を含んで自分の課題を知ることができるので、単元の導入時には必ず取り組ませたい。一人一人の課題を明確にすることによって、教科書の紙面に示されている「はっけんロード」が、子どもにとって多様な意味や価値をもつ「自分にとってのはっけんロード」となることを期待している。

子どもの地域との関わり方は、個人差が大きいものと考えられる。また、地域の特性によっても関わり方に濃淡が生じやすいため、教師自身が子どもの実態をつかんで本単元の指導を行うことが大切である。

この時、「わくわくスイッチ」は教師にとっても、子どもの実態や地域との関わり方を知るうえで有効なツールになる。「家の人と買いものをしたり図書かんに行ったりしたことがある」子どもは多いことが予想されるが、「まちの人にあいさつをしたり話をしたりしたことがある」子どもとなると、おそらく減るのではないであろうか。まち探検では、子どもが地域のことを体験をとおして知るとともに、地域の人と関わり、地域の人のよさに気づいたり地域に親しみや愛着を感じたりすることが、自立への基礎を養ううえで大切なことである。電子黒板上で「わくわくスイッチ」を提示し、話の流れに応じて隠れているセルを開きながら、考えることや話し合うことを活性化できるようにしたい。

©2024 KYOIKU-SHUPPAN CO.,Ltd.All Rights Reserved